

## ● 優秀賞

# 日韓の相互理解を図る歴史教材の開発とその実践 — 6年朝鮮通信使 —

(代表執筆者) 島根県松江市立本庄小学校 国際理解教育研究部

せん だ ひろ し  
仙田浩志

## 1 はじめに

### (1) 子どもたちと韓国

近年、地方都市松江市でも、韓国、中国などのたくさんのアジアの人たちを見かける。

ラジオのスイッチを入れれば韓国の放送があり、海岸に行けばハングル文字で書かれたペットボトルやインスタント食品の空の器があちこちに散らばっている。しかし、これらのことに対する子どもたちの関心は薄く、また、韓国、中国などに対する知識はほとんどない。

### (2) なぜ韓国なのか

すぐ目の前の国でありながら、日韓両国民の多くにとって、相手の国は「最も近くて最も遠い国」と言われる。近・現代史における日韓相互の歴史認識の隔たりがその大きな原因であり、両国民間にある偏見と不信感、何らかの摩擦が起こると同時に増幅される傾向がある。韓国に対する松江市民の感覚も、高年齢層になるほど微妙なものがある。

21世紀を生きる子どもたちにはこのような偏見や不信感を持たせたくない。良い意味でのお隣感覚を持ってくればと願う。

### (3) これまでの日韓にかかわる歴史学習

小学校での本格的な歴史学習は、6年生から始まる。残念ながら過去、日韓どちらの教科書も、分かり合う努力を念頭においた歴史的事実の記述はほとんどなかった。特に「日帝36年間の支配の歴史」について言えば、韓

国の子どもたちにとっては、民族の尊厳を踏みにじった日本に対しての歴史学習の時間に徹底する傾向がある。一方、日本の子どもたちにとっては、軽く流されるか、逆に加害者としての重く、暗い内容の歴史学習となるかの時間であった。では、日韓両国は、長い歴史を通してずっと相容れない関係にあったのだろうか。

歴史はその時代に生きた人間たちの生きざまの軌跡である。時空を越え、民族の違いを越えて、子どもたちに人間としての生き方を示唆するような日韓の人物を取り上げる学習はできないのだろうか。そんな思いから、良い意味でのお隣感覚を育むことをめざす、社会科教材の開発と授業実践に取り組むことにした。

## 2 研究の仮説

日韓両国にかかわる歴史的な事実の中から、事象の本質にせまる教材を発掘し、子どもたち一人一人にとって分かりやすく、意欲的に追求したくなるような授業展開を工夫、実践すれば、歴史学習への興味・関心が強まるとともに、韓国に対する親近感を抱く子どもたちが育つのではないだろうか。

## 3 研究の手だて

- (1) 日韓両国に関する客観的資料の収集作成。
- (2) その時代に生きた両国の人間の選定とその生きざまに視点をあてた授業展開の工夫。

- (3) 日韓両国の友好の歴史に関する典型的な事例の発掘とその授業展開の工夫。
- (4) 子ども自身が調べ、追求する授業展開。
- (5) 他教科と連携し、韓国文化に親しむ工夫。

## 4 手だてを具体化するために

### (1) 現地視察と資料の収集

夏休み、首都ソウル市を訪問した。「日帝36年間の韓国支配」についての現地視察と資料収集。ソウル市近郊の独立記念館における日帝時代についての数々の写真資料や実物、再現されたいくつかの拷問室の残酷なありさまに息をのんだ。我々日本人の存在に気づいた韓国の小学生たちを初めとするたくさんの来館者たちの厳しいまなざしと、広い館内いっぽいに広がった異様な静寂。歴史認識の隔たりという言葉の意味を全身で感じた。子どもたちには、歴史的事実として何を取り上げ、何を学ばせたらよいのだろうか。

### (2) 歴史的事実に関する日韓の教科書比較

韓国訪問で入手した小学校社会科教科書の内容を調べる。日韓関係において取り上げられている事柄とそれについての記述を通して、日本の教科書との違いを探る。李舜臣・安重根など、魅力ある歴史上の人物を知った。

李舜臣は秀吉軍を撃退した朝鮮水軍の武将、安重根は伊藤博文を暗殺した大韓の義士であり、いずれも韓国では国の英雄とされる。

平成12年1月、秀吉軍の朝鮮侵略時の激戦地のひとつである晋州市(釜山の近くの都市)の資料館などを、韓国の先生の案内で視察した。

### (3) 友好の歴史「朝鮮通信使」の足跡をたどる

朝鮮は、鎖国体制にあった江戸時代において、幕府が唯一正式に国交を結んだ国である。その記述をもとに、夏休み、仲間とともに対

馬から小さな船に乗り、釜山までの通信使のたどった海の旅に挑戦した。

対馬では朝鮮との外交に努力した雨森芳洲の人間としての魅力にもじっくり触れることができた。釜山での資料収集後、訪れた晋州市では、奇しくも秀吉による朝鮮国侵略を慰める405回目のお祭りが、街をあげて行われていた。

### (4) 韓国の小学校における朝鮮通信使の扱い

平成12年の夏、本校校長も含めて3名が、韓国中央部の亀尾市元湖小学校を訪問し、2時間扱いとなっている朝鮮通信使の授業内容を聞いた。

## 5 意欲的に追求できる授業展開のために

### (1) 問題意識を喚起するための導入の工夫

導入の成否は授業の成否につながる。そこで子どもたちが驚き、疑問を持ち、興味を感じ、課題意識を持つようないくつかの自作資料を用意し、導入にじっくり時間をかける。

### (2) 個の課題の尊重と共通課題に高める工夫

資料から出た個の課題を学習の流れに位置づける配慮をする。とともに個々の問題意識の類型化作業を通して共同研究意識を持たせたり、共通課題に高まるような発問や助言を行う。

### (3) 子どもの論理に沿った授業展開の工夫

なぜ? どうしてなの? 次には多分こうなるのでは? 等々、子どもたちの疑問や予想を解決していくような授業の流れを考える。

### (4) 取り上げた人物への共感と親近感を持たせる工夫

・「亀甲船」により豊臣水軍を徹底的に撃破した不屈の名将「李舜臣」は、仲間の嫉み

に何度も生命の危機にさらされた人でもあった。

- ・江戸時代、朝鮮外交に多大な力を発揮した対馬藩「雨森芳洲」の外交に対する信念は、お互いの尊重と信頼の大切さであった。
- ・伊藤博文を暗殺した韓国の英雄「安重根」は日本ではテロリストとされるが、獄中にある彼の生きざまは、日本人看守たちに深い感銘を与えたという。時空を越え、日韓の違いを越えた人間としての魅力を持っている。

#### (5) 多様な学習形態と、他教科と関連づけた親近感につながる取り組みの工夫

見る、調べる、インタビューする、書く、劇化するなどの多様な学習形態の中で、個々

の問題意識の解決へ配慮する。またインターネット通信を利用して、韓国の先生と意見交換をする。教育委員会派遣の韓国人講師との懇談の機会を持つ。

## 6 授業展開の計画

### (1) 実践単元

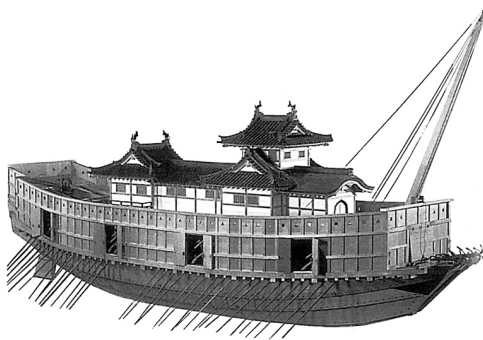
鎖国の中の日本と朝鮮 「朝鮮通信使」

### (2) 単元の見どころ

- ・江戸幕府と朝鮮国とを結ぶ友好の使節であった朝鮮通信使を通して、外国の文化に対しての、江戸幕府の思いを考えることができる。
- ・朝鮮通信使についての学習を通して、日本

| 時間 | ねらい                                                                       | 主な発問                                                                             |
|----|---------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|
| 1  | ○秀吉の朝鮮国侵略<br>・秀吉の朝鮮国侵略の様子を資料から理解するとともに、戦争によって被害を受けた朝鮮国の人々の立場に立って考える。      | ・「釜山城の戦い」の絵からどんなことが分かりますか。<br>・「耳塚」の文章資料を読んでどんなことを感じましたか。                        |
| 2  | ○強いぞ李舜臣！ 朝鮮国の反撃<br>・秀吉の朝鮮国侵略が失敗したかには、李舜臣を中心とした朝鮮国の人々の努力があったことに資料から気づく。    | ・「亀甲船」と日本の船の違いを見つけよう。<br>・李舜臣がなぜ韓国で英雄なのかを資料から考えよう。<br>・「蔚山城の戦い」の絵からどんなことが分かりますか。 |
| 3  | ○朝鮮通信使来る！<br>・朝鮮通信使の絵巻から、江戸時代の日本と朝鮮国との交流に気づき、朝鮮通信使に対する興味を持つ。              | ・江戸時代に日本と朝鮮国との仲はどうなったのだろう。<br>・絵巻を見て気づきや疑問を発表しよう。<br>・この行列は何というのか、教科書から探したそう。    |
| 4  | ○調べよう！ 朝鮮通信使<br>・なぜ朝鮮国の人が日本に来るようになったかを資料から読み取る。<br>・個々の疑問について調べる。（課外も使って） | ・家康の手紙をもらって朝鮮国の人々はどう思っただろう。<br>・朝鮮国との交流が再開したことをどう思いますか。<br>・自分の疑問について資料を探して調べよう。 |
| 5  | ・調べたことを発表し合い、朝鮮通信使が当時の日本人に、文化的、学問的、芸術的にどんな影響を与えたかを考える。                    | ・調べたことを発表し合おう。<br>・質問やアドバイスを言い合おう。<br>・ビデオを見て朝鮮通信使についてまとめよう。                     |
| 6  | ○雨森芳洲ってすごい！<br>・雨森芳洲の文章資料を読み、彼の生き方や考え方に触れ、国と国とのつきあい方において大切なことは何かを考える。     | ・雨森芳洲のお話を読んでどんな感想を持ちましたか。<br>・日韓のその後の歴史はどうなっていったのだろう。                            |

●資料1／「朝鮮通信使」指導計画（ねらいと主な発問）



●資料2／安宅船（出典：『佐賀県名護屋城博物館総合案内』）

と朝鮮国が深い信頼関係で結ばれていたことを知る。

## 7 指導計画…6時間扱い

「朝鮮通信使」指導計画とねらい、および主な発問を資料1に示す。

## 8 授業の実際

### (1) 第1時—秀吉の朝鮮国侵略

初めに「釜山城の攻防の図」の拡大したものを持示した。秀吉の軍隊が大勢で、船で上陸し、釜山の城を取り囲んでいる図である。

T「この絵を見て気がついたことは？」

S「日本と外国が戦っている。」

S「城外の兵は日本刀を持っているから日本人で、城内の旗や服装を見ると朝鮮国の人だと思う。」

その絵が秀吉軍と朝鮮国軍との戦いの場面であることを説明する。

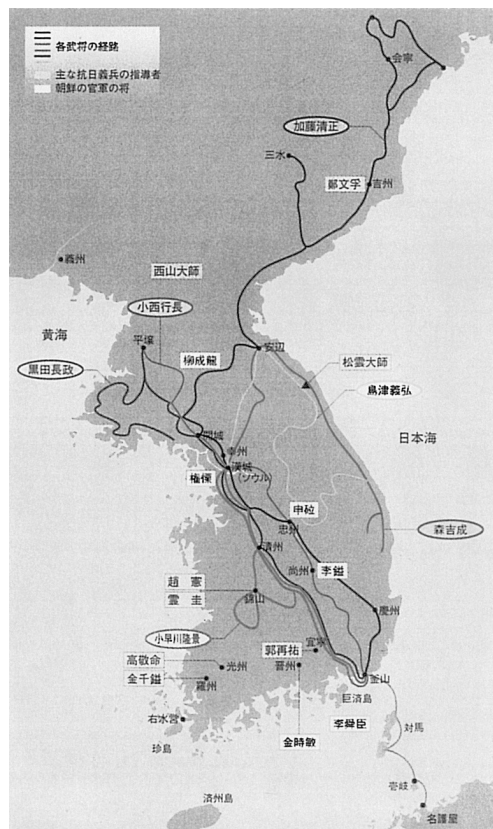
T「この城はどこにあるのかな。」

S「朝鮮国の人が守っているから朝鮮国だ。」

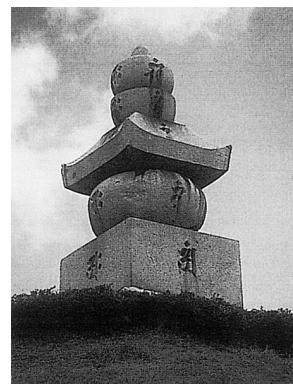
多くの船と人数で秀吉軍が攻めていることが分かった。

安宅船も持示した（資料2）。船の上が城の形で、全長39m、教室4つ分もあることに驚く。

T「どのくらいの人数で攻めたのかな。」



●資料3／文禄の役の経路図（出典は資料2と同じ）



●資料4／耳塚（出典は資料2と同じ）

S「千人。」「5万人。」…

秀吉軍の侵攻経路を示した朝鮮半島の地図と各軍団の人数の表を持示した。子どもたちは、15万人という数字と、中国国境付近まで攻め上っていることにまた驚いた（資料3）。

次に、戦いの様子を学習するために、耳塚の写真を持示した（資料4）。

朝鮮の人たちが、秀吉軍がしたことの中で、もっともごんくでやばんだと思ったことは、朝鮮の人たちの耳や鼻を切って、日本に送ったことだ。

秀吉は、はじめは部下に対して、討ち取った敵の首を塩づけにして送れと命令して、自ら首実検してほうびをあたえていた。しかし、あまりに首の数が多く、朝鮮から送ることが難しくなったため、後には、かさばる首の代わりに、耳や鼻を切って送るように命じた。

例えば、加藤清正は、兵士一人当たり 3 個ずつの鼻切りを命じた。部下の一人が、「兵士、農民、男女の区別なく殺し、生まれたばかりの幼児さえ殺した。残らず鼻をそいで、本部まで送った。」

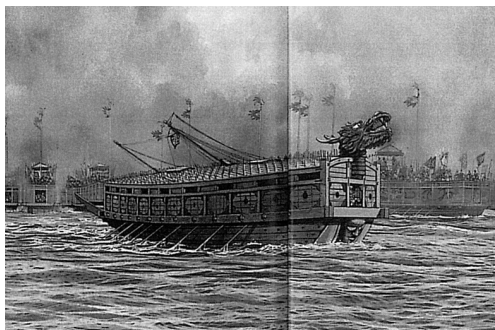
と記録している。生きている人間の鼻まで切り落としたため、戦いの後しばらくは、鼻のかけた人がかなりいたと言われている。

#### ●資料5／耳塚（自作資料）

日本では知恵のある人、頭のいい人と思われていたけど、朝鮮国の人から見ると、残酷で人の悲しみを知らないのかと思うくらいひどい人だったという反対側の秀吉を知って、勉強になりました。関係のない市民までの耳や鼻をとるなんて、ひどいと思いました。（T児）

今でもこの時のことを韓国の人は忘れていないと先生から聞いて、広島に落ちた原爆の悲しさを日本人が忘れないのと同じだと思います。（M児）

#### ●資料6／耳塚についての子どもの感想



●資料7／亀甲船（出典：『歴史群像シリーズ、文禄・慶長の役』学研）

S「お寺か神社かで見たような気がする。」

S「戦いで死んだ人の墓かな。」

T「下に何かが埋めてある。何だと思う？」

S「人間。」「武器。」「お金。」…

T「約5万人分の人の耳が納められている。」

S「エー！」

驚きと気味悪さの混じった声が出る。そして、南原城の戦いの様子と耳塚の話をもとめた文章資料を読む（資料5）。

今まで、秀吉に対してプラスイメージしか持っていなかった子どもたちは、朝鮮国の側から見た秀吉の別の一面を知るとともに、戦争の悲惨さを感じた（資料6）。

そんな秀吉軍の侵略に対して、朝鮮国の人々は黙って耐えたと思うか、反撃したと思うかと質問すると、大多数の子が、反撃したと思うと答えた。

#### (2) 第2時—強いぞ李舜臣！ 朝鮮国の反撃

まず、朝鮮の亀甲船（コブクソン）の写真を出して、気づきを発表した。見たこともない形の船に、子どもたちは興味を持った（資料7）。

S「横から櫓が出ているのは日本の船と同じだ。」

S「ドラゴンの頭は何のためだろう。」

S「屋根で上がふさいである。」

S「槍がたくさん突き出ている強そうだ。」

この亀甲船を考案し、秀吉軍の軍船と戦った人「李舜臣」を紹介した。韓国のだれもが李舜臣を知っており、韓国の小学校の玄関の前に銅像も立っていたという教師の体験談を紹介した。

なぜ、そんなに有名なのかということで、18回にのぼる海戦の記録の表を提示した。その表は、去年、本校に講師として数回来ていただいた韓国の日本語学校教師、南君弦氏にメールでお願いして調べていただいた資料である（資料8）。

ほとんど朝鮮国側が大勝利していることと、

| 海戦       | 日時               | 参加兵力   |        | 勝敗     |                  |        |        |
|----------|------------------|--------|--------|--------|------------------|--------|--------|
|          |                  | 朝鮮軍(隻) | 日本軍(隻) | 朝鮮軍の勝利 |                  | 日本軍の勝利 |        |
| 1 玉浦海戦   | 1592 年 5 月 7 日   | 50     | 50     | ○      | 26 隻撃沈           | ×      |        |
| 8 閑山島海戦  | 1592 年 7 月 8 日   | 72     | 70     | ○      | 66 隻撃沈           | ×      |        |
| 9 安骨浦海戦  | 1592 年 7 月 10 日  | 72     | 80     | ○      | 76 隻撃沈           | ×      |        |
| 10 釜山浦海戦 | 1592 年 9 月 1 日   | 173    | 470    | ○      | 128 隻撃沈          | ×      |        |
| 11 熊川海戦  | 1593 年 2 月～3 月   | 89     | 40     | ○      | 40 隻撃沈           | ×      | 2 隻撃沈  |
| 16 漆川梁海戦 | 1597 年 7 月 14 日  | 100    | 600    | ×      | 李舜臣不参加           | ○      | 88 隻撃沈 |
| 17 鳴梁海戦  | 1597 年 9 月 16 日  | 12     | 330    | ○      | 31 隻撃沈           | ×      |        |
| 18 露梁海戦  | 1598 年 11 月 19 日 | 146    | 200    | ○      | 200 隻撃沈<br>李舜臣死亡 | ×      |        |

●資料8／海戦の記録（自作資料）

唯一朝鮮国側が負けた海戦には、李舜臣が参加していないことに気づき、李舜臣の強さに感心していた。

海戦の様子をイメージ化させるため、韓国で放映された「壬辰倭乱」のドラマのビデオを見た。おとりの船を使っておびきよせて、島陰に隠しておいた亀甲船で一気に秀吉軍を壊滅させる迫力満点のシーンに、子どもたちの目は釘づけになっていた（資料9）。

T「海を朝鮮国に押さえられた秀吉軍は、どうなったと思いますか。」

S「人を送れないし、帰ってこれない。」

S「人だけでなく武器や食料も送れない。」

T「すると陸での戦いはどうなるだろう。」

S「秀吉軍は負けていったと思う。」

そこで、「蔚山城の戦い」の図を調べた。中心部では、鉄砲を打ちかけているそばで牛を殺して食べようとしている加藤清正軍の兵士の様子を見て、「やはり食べ物がないで困っているようだ。」と発言していた。

まわりをぐるりと取り囲まれている様子を少しずつ見せていくと、秀吉軍の劣勢がよく分かった。

T「朝鮮国は日本をうらんでいるかな。」

S「絶対にうらんでいる。」

T「日本と朝鮮国の仲はどうなっただろう。」

S「悪くなった。」

朝鮮国軍の船は、日本軍の船よりも工夫がたくさんあって、船でも日本は朝鮮国に負けていたのかなと思いました。李舜臣は海のことをよく知っていて、その知識を戦いに生かせるからすごいと思います。秀吉は日本の歴史で頭がいい人と言われているけれど、それ以上に李舜臣は、頭が良くて尊敬されているんだなと思いました。（O児）

●資料9／李舜臣についての子どもの感想

T「では、秀吉の後、江戸時代になっても、仲が悪かったのかな。」

S「耳を切り落とすようなことをしているんだから、忘れるはずがない。きっと悪いままだと思う。」

S「家康はこの戦いには参加していないから、江戸時代にはよくなったと思う。」

最後に、朝鮮国と日本のその後の関係を予想させ、江戸時代の学習につなげた。

(3) 第3時—朝鮮通信使来る！

初めに朝鮮国侵略について振り返る。だれがどこの国を攻めたか？ どちらが勝ったか？ 耳塚とは何か？ 朝鮮国の人は日本のことをどう思ったか？ 前時までの学習を確認した。

T「では、家康の時代になって、日本と朝鮮国の仲はどうなっただろう？」

子どもたちの予想は、良くなったと悪くなったに分かれた。

T「この大きな巻物の中に、それが分かるヒントがたくさんあるよ。見たいですか。」

S「見たい。見たい。」

重々しく巻物を取り出し、少しずつ見せていく。まず案内の二人の武士が見えてくる。馬に乗り、旗を持つ朝鮮国の人が出てきた。

T「これはどこの人だろう。」

S「朝鮮国の人だ！」

朝鮮国の楽隊やかごを担ぐ日本人も出てくる。ついに黒板をはみ出してしまったので、



●資料10／朝鮮通信使の絵巻を見て

私は壬辰の時、関東に在り、兵事に関係していない。朝鮮と私との間にあだやうらみはない。和を通ずることをこう。

●資料11／家康の手紙（自作資料）

壬辰の変は、貴国がゆえなく兵を動かし、きわめてざんこな乱を起こした。我が国の君臣の心は痛く、貴国とはともに一つの天をいただくかぬようになった。（中略）今、貴国が古きを改め、先代の非を改めたいといって、ここに誠意を示されたが、この言葉のとおりであれば、どうして両国の民の幸福でないことがあろうか。ここに使いを送って、気持ちにお答えします。

●資料12／朝鮮国王の返書（自作資料）

廊下を持って出て広げていく。3分の1まで広げたところで人数を数える。「70人だ！」隣の教室の前まで来て、やっと巻物が終わる。

これは、図鑑に出ていた朝鮮通信使の巻物を模造紙大に拡大してつなげたものである。あまりの長さに子どもたちも、資料に引きつけられていった（資料10）。

T「この巻物を見て、朝鮮と日本の仲がどうなったか分かる証拠を見つけよう。ほかに気づきや疑問があれば、後で発表しよう。」約20分間、子どもたちは集中して巻物を調べて、ワークシートに書きこんでいった。

S「日本人と朝鮮国の人が一緒に大名行列みたいなのをしているので、仲が良くなったと思う。」

S「楽器などを鳴らして楽しい雰囲気だから、仲が良くなったと思う。」

S「日本人が道案内しているところが何か所か出てきたから、ここは日本だと思う。朝鮮国の人が日本に来ているということは、仲が良くなったと思う。」

子どもたちの意見は、仲が良くなったに傾いていった。

そのほかの気がついたことや疑問として、次のようなものが挙がった。

S「日本人は歩いていて、朝鮮国の人は馬に乗ったり輿に乗ったりしているから、日本人が歓迎しているんだと思う。」

S「武器を持っている人がいるのは、まだ日本は危ないと思っているんじゃないかな。」

S「人間が乗っていない箱のような物を大事そうに担いでいたがあれは何だろう？」

（実際は朝鮮国王からの国書を入れた箱。）

S「日本を恨んでいるはずなのに、なぜ日本に来たのか？」

そして、この行列が朝鮮通信使であることを教科書で確認した。

#### (4) 第4・5時—調べよう！ 朝鮮通信使

前時の子どもの疑問の中の「なぜ日本に来

たのか？」という疑問を取り上げ、朝鮮国との国交回復が成立したきっかけとして、家康の手紙を提示した（資料11）。

T「これを見た朝鮮国の人はどう思ったか。」

S「まだ疑ってると思う。」

S「喜んだと思う。」

朝鮮国はすぐに信用せず、使いを送って家康の気持ちを確かめたこと、家康が1390人も朝鮮国の捕虜を送り返した話を紹介し、朝鮮国王の返書を提示した（資料12）。

T「朝鮮通信使が始まったいきさつを見ただ、みんなはどう思う？」

S「家康から先に謝ったのが良かった。」

S「朝鮮国もうらみがあるはずなのに、仲直りしてえらいと思う。」

実際は、対馬藩による国書改ざんという裏の事実があった。また、家康側には諸侯に徳川家の威光を示す目的があり、朝鮮国側にも清からの圧迫や国家の疲弊により日本との国交回復をする必要があったが、複雑になるのでそれらのことには敢えて触れなかった。

次に、第3時に各自が持った疑問について、教科書や資料集、辛基秀氏著作の朝鮮通信使に関する本やインターネットの資料を使って各自が調べ、発表した。

回数、人数、行程、接待の様子などだけでなく、朝鮮通信使が当時の日本人に大歓迎されたことやその足跡が今でも唐子踊りや人形など各地に残っていることなどに、たくさんの子どもたちが興味を持って調べていた。

東京書籍の教科書には、絵や図入りでかなり詳しく資料が載せてあり、概要をつかむのに役立った。

そして、最後に、朝鮮通信使についてのビデオを見た。やはり映像は子どもの印象に残りやすいと感じた。

#### (5) 第6時—雨森芳洲ってすごい！

教科書やビデオに出てきた雨森芳洲について、自作の文章資料を使って学習した（資料

雨森芳洲は、1668年、現在の滋賀県高月町に生まれました。父が町医者であった関係で、小さいころから、漢文、儒学の教養を身につけ、9歳の時には、漢詩を作るほどでした。

芳洲は長きにわたって、対馬藩で朝鮮国との外交を担当しました。芳洲はまた、当時釜山にあった日本の役所にたびたび滞在し、朝鮮国の人々の生活に親しく接し、朝鮮国の人々と深く交わりました。

芳洲はこんな話を紹介しています。「日本人が朝鮮国の役人に『朝鮮国の国王は庭に何を植えるのか？』と尋ねたところ、その役人は“麦”と答えた。その答えを聞いて『やっぱり朝鮮国はたいした国ではない。』と笑った日本人の役人がいた。その役人は、草花でも植えれば良いものを、麦だなんて、と思ったのだろう。これは朝鮮国では、国王自ら農業のことを忘れないということなので、昔から美しい考え方とされていることなので、きっと日本人も感心するだろうと思って答えたのに、日本人からあざけりを受けてしまった例なのだ。」

どの時代であっても、とかく自分の国が優れていると思いがちですが、芳洲はその考え方が誤りであることを指摘し、国と国とは平等であることを説きました。自分の考え方を通すために武力や威圧にすぐに頼るのではなく、粘り強く正しいと思うことを説得していくことの重要性を説きました。

芳洲は 1711 年、1719 年の通信使が来日した際のお世話をし、両国のまさに橋渡しとなりました。

#### ●資料13／雨森芳洲（自作資料）

13)。

T「お話を讀んだ感想を発表しよう。」

S「小さい時からいろいろ勉強していったから、朝鮮国の人のことを理解できたと思って、すごくいい人だなと思った。」

S「通信使一行の世話を任されていたから、みんなにとっても信頼されていたと思う。」

S「朝鮮国の言葉だけでなく、文化を日本に教えたかったのかなと思いました。」

S「国と国とが平等だと言ったことがすごい



と思う。今はだれもが平等な時代だけど、昔はそうじゃなかったから、よけい偉いと思う。」

子どもたちからは、たくさんの感想が出た。

T「雨森芳洲のような人たちの活躍で、日本と朝鮮国は、江戸時代を通じて長い間、友好を続けることができました。最後にこの新聞を見てください。」

韓国における日本文化開放の記事を見せて、考えさせた。

T「日本文化開放ということは、最近まで日本と韓国の関係はどうだったのかな？」

S「悪かったと思う。」

T「では、江戸時代に仲が良かった日本と韓国の間には、その後どんなことがあったのか、今度学習しよう。」

明治時代の韓国併合や安重根の学習への興味づけを行って、学習を終えた。

## 9 反省と今後の課題

### (1) 興味を持って学習に参加し、良い意味での 隣感覚が生まれたか？

担任外教師による飛び入りの6時間授業ではあったが、社会科学習に対してやや消極的な子どもたちも、毎時間、興味を持って授業に参加してくれた。学習終了後の感想には、「この勉強で、少し社会科が好きになった。」とか「まだ少し知りたいことがあるので、自分で調べたい。」など、前向きな反応が多かった。

色彩豊かに拡大された「亀甲船」「李舜臣肖像」「日本朝鮮国海戦図」「晋州城攻防図」や10メートルに及ぶ「通信使行列図」、ビデオによる海戦などをはじめとする視覚・聴覚に訴える資料は、子どもたちを楽しませ、驚かせ、疑問を持たせるのに効果的であったと言える。

なお、導入時に出たたくさんの個々の興味や問題意識を生かし、類型化してグループの

問題として追求する時間をきちんと1単位時間持てなかったことは、子ども自らが主体的に作り出す授業として、弱かったのではないかという悔いが残る。

### (2) 人物を通し日韓の相互理解はできたか？

授業の後、豊臣秀吉に対する子どもたちの評価が低下し、否定的になったことが気にかかった。日韓の相互理解を進めるためには、歴史的な事実や人物の生き方に対して、多様な見方、考え方ができる子どもを育てることが必要である。飛び入り授業とはいえ、秀吉という人物の魅力の数々をきちんと指導しておくべきであり、ディスカッションを通して、その人物に対する賛否両論が渦巻くような授業展開が必要だったと思う。

同じ生きざまという点から考えると、李舜臣に対しては小西行長がふさわしかったのかもしれない。小西行長は何よりも生命を尊んだ悲運の武将と言われる。朝鮮侵略の戦いの最中でも、戦争回避への努力を必死に続けた(韓国人著者による)。日韓二人の武将に関する読み物資料を通しての子どもたちの話し合いから、子どもたちによる別な後日物語ができた可能性もある。

本実践の結論として、多様な見方、考え方を生み出すためには、バランスのとれた日韓相互の客観的資料と取り扱い時間に基づく授業が大切であることを痛感した。と同時に人間の生きざまを子どもたちが真剣に、深く考えるためには、1時間の授業の構成をもっときちんと考える必要がある。

本単元は「3人の武将と全国統一」(4時間)および「江戸時代」(15時間)の中で取り扱う。未来に生きる子どもたちへの必要性の高さ、取り扱い時間から考えても、今後は「総合的な学習の時間」における「日韓の相互理解教育」という題材の中での社会科学習として扱うことも、可能ではないかと思う。

松江市小学校連合音楽会は、毎年10月に開

催される。それに向けた「コッパテソ（お花畑）」「パンウルコ（すずらん）」などの韓国語による全校合唱も、子どもたちの目を韓国に向けることに役立った。韓国語の指導をしてくださった張先生やユン先生と県民会館大ホールでともに歌った感激も、韓国をより身近に感じるために良かったのではないかなと思う。

### **(3) 日韓共同による「朝鮮通信使」教材開発と授業実践を通してのお隣感覚を！**

今、慶北外国語高校教諭の南先生（日本語担当）を通して、韓国の先生たちと協力して同一指導案による「通信使」の授業実践ができないものかと考えている。訪問を含めての何度かの話し合いの結果、その第1段階として平成13年1月に、元湖小学校の先生が本校を訪問する予定となった。そういう実践を通して、日韓の相互理解教育とは何かを改めてもう一度考えてみたい。